

粹學新編一松戲言

初編下

柳田文庫

文庫11

A1906

2

10

15

20

25

文庫 11
A 1906
2

粹學新論一 孟戲言初編下の巻

東京 荅柳醉史戲著

第三回

導悟庵の款待
比翼塚の神社

思ひきや。かじ枕の腕も。城傾くる傾國の力。
商ふ情の湊得手小帆うける入舩や。客の出舩。
比楫とりて。浪の浮寐比仇枕かじき夢り現み。
も。魂飛で遊行る。浮世の人比飯の宿昨日の花。

柳田泉文庫

48-8201

老翁言一五言詩

へ今日の夢金に任せる河竹の實の節に非せと
へ。知も知ぬも甲鳥夜の。夜毎に換る浮情左様な
ら御機嫌よふ。か近い内との艶言に。生あく別れ
来る客も。誰うへ今日の妻をらん。仇！勤の仇！
身も。揃へぬ花の散るを惜も。胡角一声霜後の
夢の。覚て亦さく杜鵑泣て明石のうら約束に。悟
るも有へ。迷ふも有り。智なるも。愚なるも。貴きも。
賤きも有へ。老若の。差別へあうで。聚ひ来る。宇頂
天下の懶惰者。白日に酔を借て。青天に魂を飛せ。

石氏ノ女嫁テ
赤郎ガ婦トナル
尤出テ婦ニ妻
之ヲ思フテ至
ル日ノ五言留大
風ヲナシテ天下
婦人ノ為メ高機
ヲ阻ムト故石
尤下名亦名部
三作李予義山ガ
詩見分リ矣

抑も此國の氏神へ。比翼塚の神社に。て。愛惜戀
情に。いやりこなり。國人へ。萬づ輕薄を以て肯
と。衣食へ素的もなく。驕れども。囊中へ毎に空
し。櫻へ入相に花を咲せ。檐に懸たる暗燈に。真
如の月を蓋ふて照し。思ひ切れぬ煩惱の犬へ。哀
別離苦の巷に漂ひ。定離を厭ふ鴛鴦へ。愛慕の池
に。きてぞむ。慄と身ふしむ。石に風へ。見越の松
に。琴將操し。客を待てる。人力車夫へ。抱提燈で寒
さを凌ぐ。聚ひ来る人還る人へ。通ら。不通り。白菊

碎學新論一評戲言切編卷之下

の。を。唄。唱。ふ。て。立。在。め。り。血。を。叩。て。呻。る。も。有。べ。
現。を。抜。け。跳。る。あ。り。舌。も。ま。う。う。て。怒。る。も。あ。れ。
べ。願。え。づ。い。て。笑。ふ。も。あ。り。愚。痴。な。る。有。未。練。あ。り。
肝。癪。持。あ。り。阿。房。あ。り。情。の。有。あ。り。無。情。あ。り。待。人。
を。よ。ぶ。呪。文。あ。れ。べ。可。厭。的。を。返。き。呪。ひ。あ。り。後。生。
だ。り。ら。さ。と。引。と。ゑ。て。口。舌。せ。ぬ。日。も。青。切。醉。醒。み。
飲。む。泥。水。の。深。さ。へ。落。る。を。厭。へ。ぬ。へ。此。國。人。の。定。
業。な。る。庵。去。程。み。蕩。吉。へ。仙。嬢。の。教。訓。み。順。ひ。香。
の。烟。み。案。内。し。て。夢。と。も。無。く。現。と。も。無。く。傾。城。傾。

州。第。一。な。る。迷。の。津。み。着。み。け。れ。べ。先。づ。比。翼。塚。み。
參。詣。せ。ん。と。西。風。東。風。と。逍。遙。を。る。み。柳。阪。花。堤。へ。
洞。門。み。通。じ。玉。樓。金。屋。へ。彫。軒。を。接。し。道。路。修。繕。の。
奇。麗。な。る。衣。服。調。度。の。壯。觀。な。る。我。國。芳。原。の。如。き。
み。あ。ら。び。幾。千。の。美。人。へ。街。頭。み。往。来。し。て。柳。腰。風。
み。裊。し。蓮。歩。香。を。生。じ。正。は。是。婦。娥。廣。寒。を。出。て。仙。女。此。
九。天。よ。り。降。る。う。と。怪。む。許。り。眼。み。視。る。毎。み。其。美。
に。愕。き。耳。み。聞。く。毎。み。其。盛。な。る。み。呆。れ。て。茫。然。と。
そ。と。れ。と。る。折。う。り。迥。々。彼。方。の。三。層。の。下。に。矮。樓。

の欄干。我の物を思ひ顔。空を瞻仰て立在る。最う若き遊女あり。西施が心を病るとき。顰て倍美なるが如く。小町が萍を詠ぜし時。誘ふ水あり。たと。打詫るゝ似て。比へて言ん。よしもなし。蕩吉。此有様。慢る心浮れて。禁むる能ハ。思はむ。声をもげまゝ。て。嗚呼。美なる哉。此遊女。人間世界。有ん。と。ハ。神あり。ぬ身の知ざりき。我通人と生れ。一甲斐。一夜流れの仇夢ありとも。結んで還る。ハ。本意あり。比。先。白眉神。觀みて。仙嬢。

教訓受たる。仙術を以て。日本。ハ。我が如き。粹の粹。ある粹。中の粹。なる人の有。夏を。知して還る。ハ。國の。然。然。ど。日の猶高ければ。黄昏を待て。起らん。然々と。獨。兼。知。但。見。ハ。今迄。立。在。美人。ハ。何時。障子の中。み。や。入。けん。影。み。視。む。あり。み。ければ。蕩吉。ハ。本意。なくも。李夫人の面影を。烟の中。み。視。失ひ。揚。貴。妃。が。亡。魂。を。馬。塊。に。招。く。心。持。て。數。回。歎息。一。亦。一。二。町。行。程。み。割。烹。店。と。お。ほ。く。て。最。小細。なる。一。構。あり。柱。木。の。牆。根。ハ。高。う。ら。ね。ど。園。此

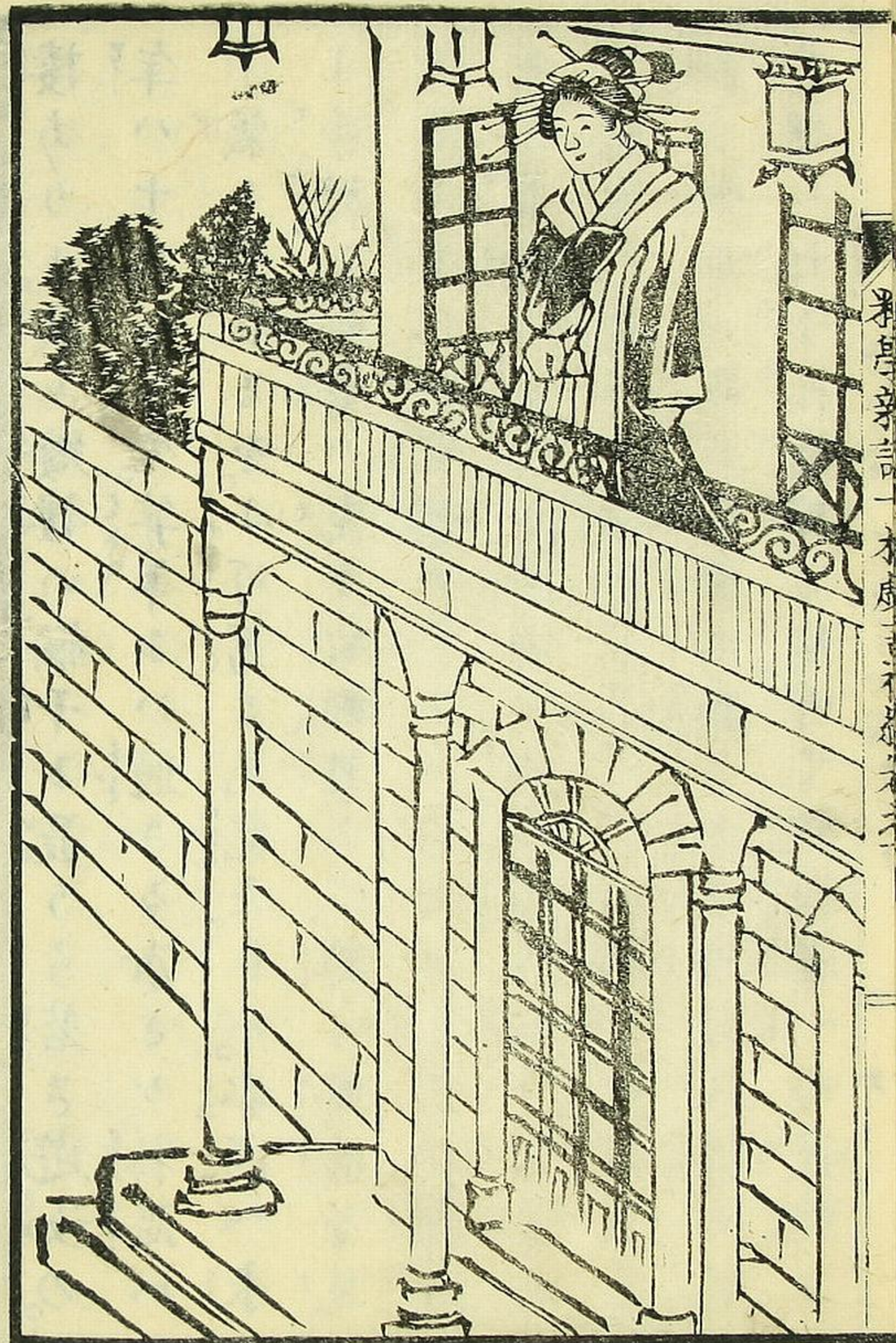
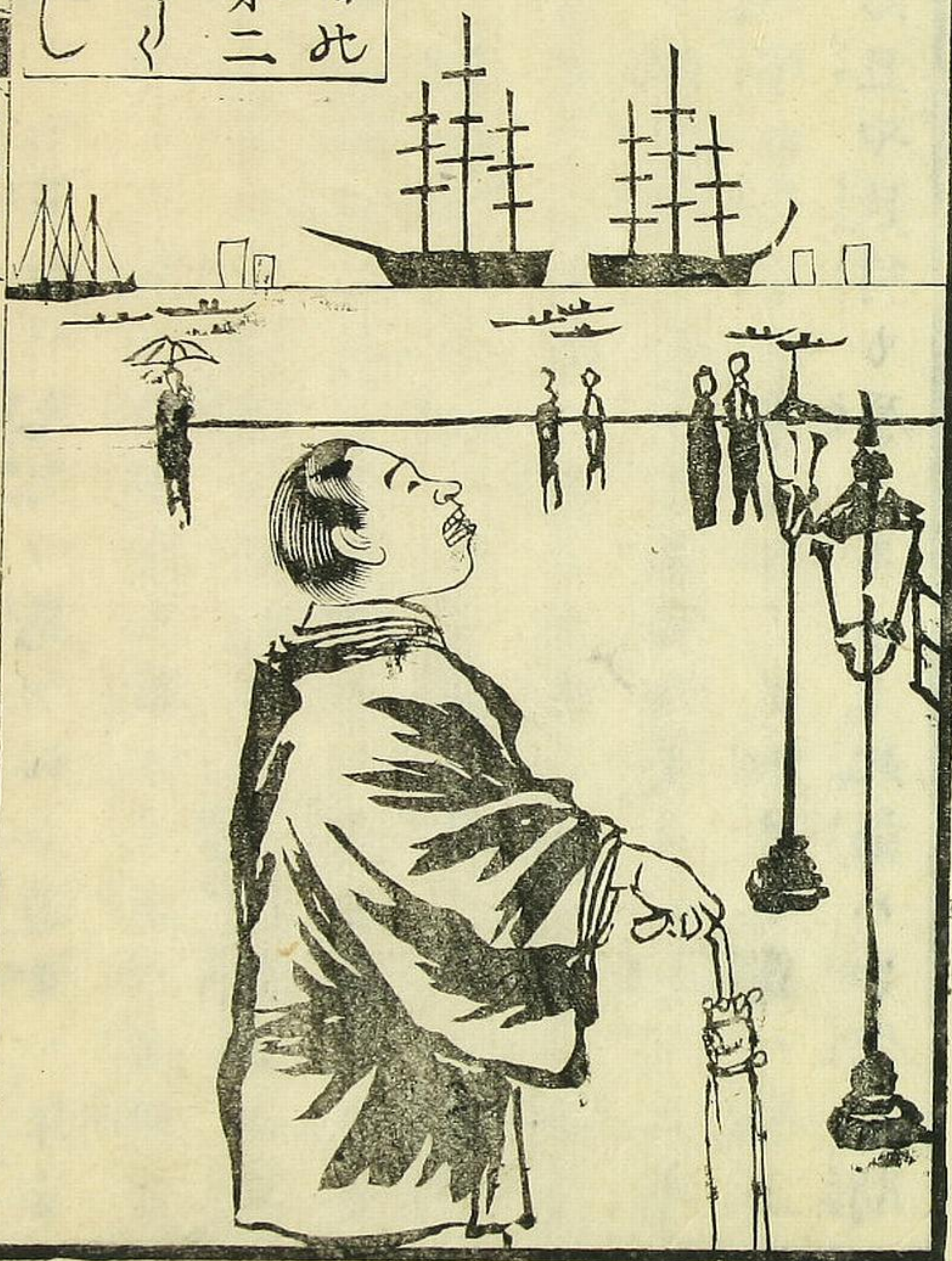
物好風流を尽せし家の廣うりて。世も御たる
造営。本戸に真面も。導悟庵と題せし匾額をう
け。亦傍の柱も。即席料理と記したる。招牌を揚
げたり。蕩吉ハ心嬉しく。幸ひも空き腹をも繕
はむや。と思ひて突と立入て音信ハ。啞と應を
程もなく。家婢二人三人出向て。辱光臨との款待
み。頓て座を占え。酒肴など命ぜれば。心得侍りと
忙しく持出き酒食の盃盤主の女房も出来りて
光臨を謝し酒を勧め。亦蕩吉ハ打對ひて。昨夜ハ

定えし愉快なりん。何れの家にて何と稱遊
女をバ愛させ給ふ。細み知し給ひねと問れて蕩
吉笑を含と。否とよ我ハ日本にて。自惚屋蕩吉と
稱呼者なり。粹学教授の其為。這度初て此國へ。
未遊せし者も。有ハ。不知案内にて心苦しく。問
度音の種々ありて。斯ハ世話もありつるなり。
と云ハ家婦ハ點頭て。叔ハ貴客ハ日本にて。粹学
の先生なりし。知らぬ事とて失禮せり。宥させ
給へと打詫れば。蕩吉ハ高慢顔を鼻の先へ無頼

つうせ。家婦を斜よこにゐろりと視遣みやり。知らぬ事ことこそ
誤あやまりも。菩薩ぼさつにあらぬ凡人びんなんにあり。勝かちの更しこなる
ま。斯う慇懃いんしんに詫わがりれてハ。却さかて這方こゝろで面目めんかくな。酒さけ
の席おしハ故ゆゑに。禮れいを棄するが互たういに樂たのしみ。然さハ非あらむやと
打笑うちわらへバ。家婦あやうも吻吻くふくふと打笑うちわらて。只ひと管酒すうさけを勧すすえけ
り。斯うりける程ほどに蕩吉どうきちハ。十二分じふにぶんに醉ろいを尽つくし。猶なほ日
の傾くさむくを待まちと雖いども。まど二時ふたときにハ過まぎさるる處ところに
れば。又また家婦あやうに對むかひて云いけるやう。叔問さくもんまほしに
更しこ社しやあれ。嚮きやうに這方こゝろへ来きぬる街まちに。右みぎに三層さんじやうの美び

樓ろうありき。其そが矮樓わいろうの欄干かざんに。最いうら若わかき遊女うゑめの。
年としハ十九じゅうきゅうと言いて。笄年しやうねんにハ過まぎさるる處ところに。物思ものおもハ
一い氣けに立た在あるを。小可せうか篤とくと見覺みかくたれば。此國このくにへ来き
一い手て繕はひ。今宵こんやハ左ひだりに右みぎに樓ろうみて。粹すいの奥義おくぎを見み
せまく思おもへバ。那樓あのろうの名なさへ。遊女うゑめの名なさへ。聞合きあ
せて貰もら給たまへ。と云いバ家婦あやうハ然候さうこう。嚮きやうに欄干かざんに立たれ
一い遊女うゑめハ。妾わがも其時そのとき垣間かま見みたれば。聞合きあせびとも
細こみ知しれり。剛方いまま先生せんせいの為ために之これを弁わせん抑おさも。那
花樓はなろうハ九十九きゅうじゅうきゅう眉樓めいろうと稱呼しょうこて。迷津まいじん第一だいいちの妓院きいんに

此の繪此
譯ハ第二
編ニ悉ク
解ク處



て社候らへ。然れば先生の見られ遊女ハ年な
 加若けれども。某々妓院のお職みて名ハ示申と
 呼侍り。戈智と云。繚致といひ。まゝ有間敷遊女な
 り。先生今宵遊むんと思ひ給ハ。幸なる夏社あ
 れ。夫ハ餘の事ハ候ハねど。妾が妹ハ引手茶屋
 を活業として。那処の樓より遠くも侍ら。況て
 や妾が此家族も。かなし。挙族の夏も。有ハ。日本
 より粹学の先生此来られ。と。知せも遣ハ。祝ぶ
 ならん。且や款待も厚うるを。此議ハ如何と問

ければ蕩吉横手を撲と拍ち。家婦の建議ハ極め
 て妙なり。然れば日影の落るを待て。黄昏よりも
 行ま。く思ふ。就て亦頼と度ハ。曩も小可が述べ
 る如く。初て遊び。傾國なれば。名所古跡も遊覽
 仕度酒も漸十今なれば。這所より案内の人を請
 て。此翼塚へも參詣なさん。此義を受引給ハれど。
 言ハ家婦ハ領きて。夫ハ亦易き夏也。暫く待
 ねと言さ。して。頓て次の室に立出て。声高。うら
 呼立れハ。啞と答。して。獨の奴隸家婦が。辺に出来

まければ。家婦ハ那男ハ對ひて。汝ハ客人の案内
して。此翼塚ハ赴き。黄昏ハ又從ひて疾歸りき
ねと。聶さ示し。又蕩吉ハ打對ひて。命の如く案内
を貸參かまする。這ハ通助と稱て。聊いさ粹すい学がくも志あ
る妻さいが服心の者ものハ有ハ。御心ごこころな置おせ給たまへて。自
己おのれまゝ。使役しやくしたまひ。黄昏たそがれ近くハ歸り給ひ
ね。其心そのこころ構かまして待侍まちらん。と云けるいひ。ぞ蕩吉ハ身
を起おこして。心尽こころづの程ほどを謝い。又通助ハ打對ひて。
否喃いな通助殿どとやう。不知案内の者ものハ有ハ。宜よろし

く案内を頼入たのむと言ハ通助頭うしを下さげ。仰うやせ兼ともり候まちひ
ぬ。と應こたへ。言葉ことば供侶とも。打行うち立て出行いけり。余程さう
ハ蕩吉ハ。通助と供侶とも。此翼塚このよくづを差さして急いそぐ程ほど
ハ。山やま在ある処ところハ出いでければ。通助ハ對むかひて云いやう。此
山やまハ高たかくも阿あらねど。何なんとなく風景ふうけいを帶おびたれ
ハ。花はなの晨月あけづきの夕ゆふハ。極きめて愉快えきの夏なつハや阿あらん。
此翼塚このよくづへハ此山このやまを越こて。猶なほ路みちの遠とほうらん。と問と
ハ否いなとよ此翼塚このよくづハ。此山このやまの中央ちゆうぐわうまで。五十歩ごじふハ
過すざるべし。斯かくて亦また此山このやまハ末すいの松山まつやまと呼よびて。古ふるよ

り波とさしと言傳り。客人那処を問せ。正面ハ則ち此翼塚の神社あり。曾て聞く古へ小紫となん稱る遊女の有けるが。其が深く言かせし良人の。死せるを哀傷て。墳墓は詣で自殺せし。當時世の人戀情の念深きを感じ。且其横死を憐れて。亡屍を古墳の側へ瘞免塚を築きて小細なる鎮座を営む。此翼塚と號けありと。古老の物語も聞傳へる。斯て亦其後ハ願事ある者の。此塚に祈る時ハ。何として成就せざることなく。靈驗甚

亦説
角作ル
知ラズ

多灼然なるを以て。終に氏神と社尊と祭奠り。左手の方み建接へ。吉野八千代地獄太夫初代高尾の禿倉あり。右の方ハ大磯の虎少將を初として。扇屋夕霧神屋此糸三代高尾の花扇玉菊浦里の社あり。亦本社の後ハ。桔梗屋葛木三浦屋揚巻松田屋瀬川の社あり。其他橋本屋白糸が化粧部屋の蹟油屋阿紺が化変屋鋪各縁起縁故あれど。強く繞舌て咽喉を乾多り。客人那処の茶見みて一服喫で一息つき。猶亦細く譚り申さん。

此義ハ如何と言けれバ。蕩吉ハ奥ミ入テ通助ニ
答ふるやう。實ニ長咄ノ勞レタリ。卒イコヒ
てんと。茶見世ミ立寄テ。茶を喫烟草を吸など
て。四方八方の物語ニ暫時時を移シテ後蕩吉ハ
通助ニ打對ヒテ言けるやう。貴公ガ細キ嘶
ミテ。此傾國の大社と言。此翼塚其他の神社ニ。縁
起縁故を知ノミナリ。實ニ心を慰タリ。嚮ニ
導語庵の家婦ニ言るミ。貴公も粹學ミ志ガ一有
と。然レバ其時小可も頼ミ一社思ヒつれ。且

や貴公ハ記憶もよけれバ。學ん時機を失ヒ給ヒ
そ。小可も遙日本より此傾國へ来リ一ハ。只此道
の凡夫をして。粹を得セ一欠むと欲スるのミ。貴
公も學んと思ハんミ。長く教テ得サベ一と。
言バ通助吻吻と笑ミ。夫ハ有難キ命ナレド。奴此
傾城傾國ハ。全州此翼塚の氏子ナレバ。愛惜戀情
の念ハ生レナカ。深ク。三歳の童子も教訓セ
テ自ラウ粹ナリ。是を以テ。奴ガ如キも。亦聊リ悟
のあれば。先客人の説を聴キ。腹ミ落ナバ。教訓も

受んが心は協む順ひ難いと。更は憶する色もなく。空嘯いてぞ居ありける

第四回

今昔遊女のご事
粹老妓論の裁判

這時蕩吉の通助の悪卑劣なる應を聞て。這奴は正是噺せるといと。思へど故と見下して。呵呵と打笑ひ。笑喚なる哉通助殿物を言んも人な社よれ。支那唐土へ卒知らば。日本國にて粹学の専門学士と呼ぶ我なり。貴公等が物識顔も。小可も對

て聞きうんのと。傍苦き更なり。苟も我日本へ。最古より遊女ありて。此学頗る開けぬれ。鐘や太鼓で搜索ても。野夫と化物見たことな。此傾國へ産出者へ。教訓されども粹なり。杯と。吻もハ云ども其粹の字解も貴公へ得識ま。夫粹ハ(とハ)と訓ト亦(ま)トをらむ亦(る)ハ(と)と訓ハ實もや其竅其譯を識て。此学は粹いくな。ら。野夫不通とハ粹らび終るはうるハいさ人とや。だらん。字義ハ真ふ理詰まらばや。亦青樓

妃家の事へ。取も直さば小天地あり。然れば各其道ありて。智を以て粹と爲し。愚を以て糠と爲す。人物の可否を。畢く論ぜざれば。復容易に悟り難し。縦令傾州の人種と云とも。抑買初し其日より。粹なる人へ。雖望あり。修行の上此支なりて。何なる竅も。知難うらん。千万金を費して。西東中うら言あり。自由自在に育てられ。一代野夫で仕舞あう。自己壺人粹と。覺て夢の世送る馬鹿も有り。竅さへ知ば粹なる。と。穴を穿て穴を探

し。知たが癖病でちよろくと。吻走る故行さきぐで振れて仕舞者もあり。其が種類は多しと雖ども。實に粹に甚ど得難し。難きを得るは修行みあれど。貴公が如き生聞で。十は八九は覺束な。嗟呼氣の毒やと。烟草薫ら。最伐うは罵詈れ。通助烟管を笏とり。蕩吉を屹と視て。客人暫く待給へ。理屈を拵へ字義に説ども。夫は輯附と云ものなり。思ふは粹と言真に遊ひの上手をいふ耳なり。萬は心此利あるものを。乖と言ふ

るものなるべし。いま國俗へ粹とし書ど。拍案驚奇は乖と見へたり。亦水滸傳は乖覺と。何るも則ち同意なり。抑も乖ハ元明の頃より起れる俗語。あらん歎熟之を案ずる。乖ハ來の俗省。よて。來ハ垂の本字なり。客人調詞。乘過て乖云字。誤り給ふな。一字の義解を論ずる。尤も無益。似れども。現在客人が説處ハ畢く枝葉。よて。議論の着る處を知。凡そ事物を論ずる。先其本原を説ざれば。何を以て。未治まらん。我傾

國へ来り。ハ。此道の凡夫を。て粹を得せ。む為なりと。曩も客人云。ハ。あらびや。夫程の學士。ハ。あらば。先ハ遊女の根固を説。次て枝葉を論ぜざれば。藪うら棒。よて解難うらん。解をハ客人身を殺して。幾于説とも其益あらんや。止ぬ。と冷笑へば。蕩吉ハ熱氣となり。をのく。小癩を言奴。うな。僅ハ乖の字義を知。とて。小可。ま。之を知らざらん乎。然れども古事及字義を論ずるハ。迂遠の尤も迂遠。よて。目下の益。ハ。達。ことを

一。無と雖ども望とあり。聊と根固を説聞さん。
耳を挾て聴問せよ。抑も遊女と稱するハ。我日本
の言葉より。支那唐土の言葉よりハ。非ハ偶詩經
より出たるハ。遊女の如く聞れども。我日本の遊女
と異なり。凡そ婦の哲なるものハ。却て城を傾く
る。大患ありと示しある。哲婦傾城の名なるべし。
然れば我日本よりハ。古く白拍子と云者ありたり。
遊女ハ之より本づきたる者なれば。鳥羽の院ハ御
宇なるを。亦白拍子より出たりと思はるハ。

曾て聞く寛永以前ハ。歌妓を呼て藝子と稱し。遊
女を太夫と稱へたれど。太夫と呼んも雅ならざ
れば。後より白人と呼換ふり。然れば遊女ハ白拍
子の流より出たる者なれば。白拍子の白を取て。扱
白人と稱するなり。と言せも。果は通助ハ。否々夫
ハ癖事なり。鳥羽の院の御宇より云ハ。僅に七百
有餘年。奴が熟考するハ。今を距事九百餘年。正暦
長徳の其昔光源氏の大將ハ。住吉詣で仕給ひし
ハ。神崎江口ハ遊女等が舟より浮びて行装を拜せ

んとせし支も。源氏關屋の巻み見たり。然れば遊
女へううれめと訓。最古くより有つるなり。其
古へハ傀儡女あり。幾星霜を経て後。男舞白拍
子など。稱呼換あるものなれば。白拍子こそ。遊女
より出ある者と。言ふべき。遊女を以て白拍子の。
流れなど。ハ。傍いた。亦白人と稱するも。世俗
人押竝て。客人の云る如く。想ひ居こそ可笑けれ。
這ハ大なる誤なり。案ざるは白人ハ。之美人の稱
あらん。何ぞ遊女に限らんや。美人を白人と咏ド

たるハ。知らびや唐の元禎。會真記ハ瞭然あり。
此箇ハせと云うけて。腰なる矢立取出し。何やら
書て蕩吉。示を見れば正はこれ。尋常百種花
齊發。偏摘梨花與白人。今日江頭兩三樹。可憐葉底
度殘春。此でも客人未解せびや。これ元禎が作
し。雜思詩の第五首に見えり。斯て亦會真記ハ。
金聖歎が外書せし。西廂記の卷端に載られたれ
ハ何時ありと疑ハ。くべ。くらんぜよ。是を以て
考ふれば。白人と稱するハ。美人の稱なる分明な

り。然を右左云惑へて。奴を説んとせうるれど。
夫でハ少々出過ハ非ハヤ。と云れて蕩吉憤然
て。満面殊ハ朱をそゞ。過言あり青奴隸出過杯
とハ誰ハ言や。剛方貴公が言処ハ小可知ざる
有ねども。小可ハ述可き間暇を授けハ貴公
許聴絮蟬連て。勝手次第の雑言過言。嗚呼腹立や
と言捨て。擲ハらん有様。某見世の老爺の
見兼ねハ忙しく蕩吉が。迎近く進ミ寄て。否喃貴
客衆聴給へ。若い同士此高論。いうざる老爺の

口吻あれど。此國へ生産一甲斐ハ年ハ寄ても
遊優ハやまび然ハ両士の高論も聊ハ了解
ものうら。聞更毎ハ面白く。卒うあくと聞邁て。
見世を仕舞も忘却よりき。聞ガ如きハ両説とも
是非を述るハ難けれど。想ふハ日本の客人ハ。学
びハ疎けれども。實地ハハ聞あるならん。欽亦
通助殿とやらハ。實地の議論ハ聞ねハ知ねと学
びハ最も聞たり。老爺ハ学びも實地も知ねハ。
古更来歴ハ固より論せむ。然れど遊女の古くよ



り有つる夏へ聞知とり、万葉集にも遊行の婦女
と云者有つれど、其景狀遊女の如くは聞ゆれば、
孝謙の御宇にも有つるありん。延暦大同の今
を距こと一千有餘年の上ひあり。然れば通助殿
とやりの説處こそ聊に聞ゆれども、這只書籍の
力を以て、徒に古き往昔を論むるのともて、剛方
慾界の中ひ游優するは益なり。初め日本の客人
の説りれ、夏へ游客の日要とある論をれども、
惜い哉未だ其大道を悟らば故に其説處委く自

惚み出て、全く粹の粹あるを教訓るの力なり。然
ればもや修行によつて、其粹となるの所以に説
ども修行によつて其悟るところの所以を説を、
老爺が毎に考ふるに、粹に修行によつて成る非
也。亦修行によつて成ざるは非、凡そ世の中ひ。
撰んとせれば取人ぞ稀に。黄金あるは野慕よて
意氣なるは貧なり。好男子の自惚醜男の湿濃さ。
可愛男はなぜ倅なりぬ。黄金と意氣地と男風と
兼備あるを粹とや云歟。唯粹の粹なるもの、何

うへあらび遊女等も譯もなく面白がられ。那処
へ行ても。這処へ行ても。可愛がられて惚られて。
口貝ハ言ねども。能洒落能のな一。能喜祝せ。よ
く可笑がらせ一言の无達過失なく。言更皆節は
あさり人の口舌や貫ひ引も。否と言れぬ道理
を説き。ならぬ更でも面白可笑く。成やうみな
ものもやあらん。嗚呼粹とい如何なる者ぞ。吻
言れび真似みへならび。真は異心傳心。天然自
然の生産質。鷗鵲能くもの言ども飛鳥を離れ

俗人上粹の口真似もれども。糠を離れび人
説こと極えて易く。已行ふこと甚だ難。粹も未
だ説く可らび。糠も未だ論ぜらう。此道は師
なく。非をうつ者。人を笑ふて笑はる。を
ぞ。何と理屈を云て見ても。各自一個宛面白
き。更あればこそ。花柳の巷も賑ふなるべし。野詮
百年たつと。此論許へ乾と元らん何事も
暇費お茶でも喫て黄昏ぬ中。よく歸り給
ひねと。解破られて。蕩吉ハ茫然として。辞も出

茶價を投なげてそこへいまふ麓ふもとをさしりて降くだりけり。
 畢竟蕩言ひつじやう下山げさんの後のち九十九くじゅう眉樓まゐろうひ走おもむきて亦また如何いかう
 なる物語ものがたりあるそハ巻まきを更あらたて第二編だいにひ解と分くわる
 を聴きねる

粹學新論一盃戲言初編卷の下 終

娃媛美談泥中蓮 小本壹冊 花柳醉史著 近刻

明治十三年八月 日御届

同年同月 日出版

編輯人 東京繪物町 十一番地 片岡孝次郎

出版人 東京元大坂町 十二番地 法木徳兵衛

發兌本局 同坂売町三丁目 四番地 宮崎音次郎

同芝三島町 山中市兵衛

發賣人 同本郷元町二丁目 博文堂

同本町三丁目 金港堂

東	馬喰町	森屋治兵衛
京	横山町	内田弥兵衛
賣	浅草茅町	須原屋八
捌	大傳馬町	袋屋龜次郎
書	神馬子町	巖々堂
肆	南傳馬町	吉川半七
	新大坂町	博文社
	日本橋通	小林喜右門
	壹丁目	大倉孫兵衛

東	日本橋通	須原屋茂兵衛
京	同二丁目	山城屋佐兵衛
賣	同三丁目	松田幸助
捌	同三丁目	小林新兵衛
書	芝罘町	長野龜吉
肆	松島町	山中孝之助
	横山町	牧野善兵衛
	壹丁目	伊勢屋庄之助
		出雲寺万次郎

